

# 特別支援学校知的障害高等部におけるカリキュラム・マネジメントに関する考察 ～教科等横断的な視点に基づく学習の実際～

山下 秀 樹

(北海道札幌稲穂高等支援学校 校長)

北海道札幌稲穂高等支援学校は、知的障害のある生徒のための高等支援学校である。本校において、新学習指導要領におけるカリキュラム・マネジメントに関する取組の中で、教科等横断的な視点に基づく実践を紹介する。また、それらの実践を通してカリキュラム・マネジメント上、教科等横断的な視点で教育内容の配列を考えるためには、担当する教科等の教育内容の検討に終始せず、生徒の学習において核となる教科等（以下、「コア教科」）との関連や、当該学年の全教科等の教育内容を俯瞰しながらそれらのつながりを、明示し、作ることが有効であった。その基盤となったのは、開校より教育課程の中心を担ってきた「キャリア教育（キャリア発達を支援する教育）」の取組であった。今後は、取組の評価及び改善のサイクル確立が求められる。

キーワード：知的障害／高等部／カリキュラム・マネジメント／教科等横断的な視点  
キャリア教育（キャリア発達を支援する教育）

## I はじめに

『学習指導要領』第1章第1の4において、カリキュラム・マネジメントは、「各学校においては、児童（生徒）や学校、地域の実態を適切に把握し、教育の目的や目標の実現に必要な教育の内容等を教科等横断的な視点で組み立てていくこと、教育課程の実施状況を評価してその改善を図っていくこと、教育課程の実現に必要な人的又は物的な体制を確保するとともにその改善を図っていくことなどを通して、教育課程に基づき組織的かつ計画的に各学校の教育活動の質の向上を図っていくこと（以下「カリキュラム・マネジメント」という。）とされている。

ここでいう教科等横断的な視点とは、「コンテンツからコンピテンシーへの転換」といえる。コンテンツとは「内容」という意味で、つまり「知識重視の教育」を表わしている。一方のコンピテンシーとは「能力」という意味で、つまり「資質・能力」を育成する教育を表わしている。これまでの知識重視の教育を反省し、「資質・能力」を育成する教育へと転換するのが、今回改定のねらいともいえる。

ここでいう「資質・能力」とは、現代社会に生きる生徒が新たな価値を創造し社会の創り手となる人材として必要な資質・能力であり、その育成に向け、各教科等での学習を実社会での問題発見・解決に生かしていくための教科等横断的な学習に取り組むことが求められているといえる。

こうした背景を受けて、本校でのいわゆる教科等横断的な学習の実践を紹介するとともに、この取組を通しての成果と課題をまとめたい。

## II 本校の教育課程について

北海道札幌稲穂高等支援学校は、平成23年4月に開校した知的障害のある生徒のための職業学科を有する高等支援学校である。開校に当たり、学校経営の柱として「キャリア教育（キャリア発達を支援する教育）」を掲げ、教育活動を進めている。開校3年目には、これらの実践の研究発表を行い、その成果が文部科学省「キャリア教育優良実践表彰」を受けている。

こうした実践の考え方は、「コンテンツからコンピテンシーへの転換」という新学習指導要領の基盤となる考え方とも共通しているといえる。

ただ、この10年余の取組を通して、社会の変化や生徒の実態等に対応するため、さらなる改善と充

実が必要となっている。

### III 「アイヌ」の文化・歴史等を総合的に学ぶ実践

#### 1 「見学旅行」(総合的な探究の時間・特別活動)の取組

本校においても、令和3年度は新型コロナウイルス感染症の影響で、見学旅行(修学旅行)や宿泊研修といった宿泊行事の実施については大きな変更を余儀なくされた。令和3年度においては、高等部3年生の「見学旅行(修学旅行)」が、幾度かの延期を経て、主たる見学場所等の大きな変更があった。最終的に、北海道白老町にできた『民族共生象徴空間「ウポポイ」』への見学を中心としたものに変更となった。

当然、年度当初に計画した見学場所と大きく異なるため、指導計画も大きく見直す必要があった。その際に、学年団の検討の中で、まずコンテンツとしての「アイヌ民族」に係る学習を各教科等で可能な範囲で取り入れること、さらにコンピテンシーとしてその活動を通して、自ら探究したり、仲間と協議したり、討論したりといった「問題・課題解決能力」等の育成を意図した活動を取り入れ立案することで合意形成が図られた。

#### 2 具体的な取組

##### (1) コア教科としての「総合的な探究の時間」

いわゆる「見学旅行」の事前学習や事後学習は、本校では教育課程上「総合的な探究の時間」として取り扱っている。これは、単なる特別活動としての見学旅行を行事としてではなく、見学旅行を通して、何を学び、どのような資質・能力を育成するかを明確にして進めているためである。教科等横断的な視点で考えた場合、いわゆる「コア教科」(生徒の学習において核となる教科等)としての位置づけになる。

こうした取組では、まず「見学旅行」の全体像を生徒自身につかんでもらい、この学習を通して何を学ぶのかについて、自身の目標を設定することとなる。これは、本校が開校以来どの教科等でも実践していることである。当然、入学当初は、自身の目標を適切に考えられる生徒は少ないが、まずはいくつかの選択肢から選択するなどの方法から進めて、次第に自身の目標を適切に設定できるようになってくる。

さらに、旅行に関する情報も自ら情報端末(本校ではGIGAスクール構想に伴い一人1台端末としてiPadが整備済)で調べ、それらをまとめ発表するといった活動も盛り込まれている。

##### (2) 関連コンテンツとしての各教科等の取組

###### ア 作業学習

本校は職業学科のある高等支援学校であるので、「作業学習」が学習の中心となっている。現在「生産技術科」「木工科」「環境・流通サポート科」「家庭総合科」の4つの学科があり、それぞれの学科が学級として機能している。

その中で、「生産技術科」では、これまでサンドブラストを使っていろいろな模様をつけたガラス製品、アルミ製カトラリー等を生産している(【図1】)が、この「見学旅行」に関わり、アイヌ文様をデザインしたものを制作している。単にデザインするだけでなく、そのデザインの意味するところ(美術)や歴史的な学習(社会)とも関連させ総合的なコンテンツとして学習している。

また、「家庭総合科」では、布製品の刺繍模様アイヌ文様を取り入れるなどの取組を行った。

###### イ 社会

社会では、アイヌ民族の歴史、文化等を学習し、コンテンツとして理解を深めるとともに、アイヌ民族に対する差別の歴史などにも触れ、それらを議論することを通してコンピテンシー育成の部分も担った。

###### ウ 国語

アイヌ民族に係る文化の学習として、知里幸恵氏の詩集を用いて学習を進めるとともに、アイヌ文化の背景や歴史等を学習している。社会との相互的な関連を持たせている。【図2】

###### エ 美術

アイヌ文様について学習し、ウポポイにも展示されているいくつかのアイヌ文様をコースターとして

作品をつくる学習を行っている。【図3】

### オ 音楽

アイヌ伝統舞踊の映像鑑賞やアイヌ音楽に欠かせない「ムックリ（口琴）」の演奏体験を学習している。併せて、沖縄の楽器との比較等を通してより民族音楽への理解を深めている。



【図2 国語の学習プリント例】



【図1 アイヌ文様のグラス・カトラリー】



【図3 アイヌ文様のコースター】

### (3) 見学当日の様子

見学旅行（修学旅行）については、筆者は引率責任者として同行した。

見学場所である「民族共生象徴空間ウポポイ」では、アイヌの民族舞踊を間近で見学でき、事前に「音楽」で学習していたために、「これは〇〇という意味だね」とか「〇〇を表現しているんだよ」など、生徒同士で解説するなど興味深い様子が見られた。

また、展示コーナーでは、事前に調べていたこととの違いなどをメモにまとめている生徒や展示物の解説音声熱心に聞く生徒など、非常に興味を持って接していたのには驚きであった。限られた時間であったが、生徒が積極的に見学している様子が端々に見られ、充実した研修となっていた。

### (4) 事後学習・発表会

見学旅行終了後には、いわゆる「振り返り」としての事後学習とそれを全体に発表する発表会が実施された。それぞれ、見学旅行（修学旅行）で学習したことを事前の目標に照らして振り返り、それを言語化することを通して、学習の定着を図っている。

中には、撮ってきた写真などを使いプレゼンテーションソフトで発表をまとめた生徒もあり、これまでの学習の成果がみられる貴重な機会となった。

生徒の実態によってその言語化の差異はあっても、それぞれが自分の言葉で自分の取組を発表することは大変よい経験となったと考える。

学習した事柄を自ら相互に関連させ、生きた知識として取り込むことを苦手とする発達障害がある生徒にとって今回の教科等横断的な視点での学習はかなり有効な学習であることが分かった。また、それらを自らまとめ、発表するという言語化の過程で単なるコンテンツの習得だけでなく、コンピテンシーの育成にも大きく寄与したものと考えられる。

### 3 教科等横断的な視点に立った資質・能力の育成についての考察

#### (1) コンテンツによる横断とコンピテンシーによる横断

新学習指導要領において「教科等横断的な視点」については以下のような記述がある。

(以下、学習指導要領より抜粋)

- (1) 各学校においては、児童の発達の段階を考慮し、言語能力、情報活用能力（情報モラルを含む。）、問題発見・解決能力等の学習の基盤となる資質・能力を育成していきことができるよう、各教科等の特質を生かし、教科等横断的な視点から教育課程の編成を図るものとする。
- (2) 各学校においては、児童や学校、地域の実態及び児童の発達の段階を考慮し、豊かな人生の実現や災害等を乗り越えて次代の社会を形成することに向けた現代的な諸課題に対応して求められる資質・能力を、教科等横断的な視点で育成していきことができるよう、各学校の特色を生かした教育課程の編成を図るものとする。

ここでは、「教科等横断的な視点」は、(1)と(2)で種類が分かれていると思われる。(1)はコンピテンシーによる教科等横断、(2)はコンテンツによる教科等横断である。

ちなみに(2)で言っている「現代的な諸課題に対応して求められる資質・能力」の具体的な項目については、『学習指導要領解説総則編』の付録6で内容が詳しく示されている。

学習指導要領が要求していることを整理して一覧にしたものが以下である。

- (1)-1=言語能力
- (1)-2=情報活用能力(情報モラル含む)
- (1)-3=問題発見・解決能力
- (2)-1=伝統や文化に関する教育
- (2)-2=主権者に関する教育
- (2)-3=消費者に関する教育
- (2)-4=法に関する教育
- (2)-5=知的財産に関する教育
- (2)-6=郷土や地域に関する教育
- (2)-7=海洋に関する教育
- (2)-8=環境に関する教育
- (2)-9=放射線に関する教育
- (2)-10=生命の尊重に関する教育
- (2)-11=心身の健康の保持増進に関する教育
- (2)-12=食に関する教育
- (2)-13=防災を含む安全に関する教育

こうしてまとめてみると、(2)は、前学習指導要領と同じような部分が多い。たとえば(2)-12「食に関する教育」は、前の学習指導要領から既に教科等横断的に行うとされていた。具体的にはこれまでも「理科では栄養素の化学成分について学び、社会では食糧自給率や輸出入の問題を扱い…」というふうにするまで来たところである。(2)の他の内容についても、基本的に同じように考えていけばいいと思われる。

しかし、新学習指導要領で重要視している(1)の具体的な姿となると分かりにくくなる。というのは、(2)が目指す「教科等横断」がコンテンツの共有による横断なのに対し、(1)のほうはコンピテンシーによる横断を考えているからである。そして現行学習指導要領のねらいが「コンテンツからコンピテンシーへの転換」だったことを考え合わせれば、文部科学省のねらいは(1)のコンピテンシーによる教科等横断と想定される。

## (2) めざす資質・能力

たとえば「教科横断的に論理的な力を育てる」ことをめざすとする。それは国語科を通じて論理的な力を育てることができるし、数学科を通じても論理的な力を育てることができる。ただし、それぞれ言葉では同じように「論理的な力を育てる」と言っても、実際に子どもたちが伸ばす「論理的な力」は、教科ごとに違っているはずである。それぞれの教科で育てた「論理的な力」は、全部が重なり合って、一人の生徒の全体的で総合的な「論理的な力」となるであろう。こうして子どもたちが各教科を通じて総合的に育んだ力を「教科等横断的に育成された論理的な力」というわけである。

このように各教科が全体的・総合的に子供の能力を育てていくためには、まずは、それぞれの教科がどのような力を育むのか、教科の本質をしっかりと把握していなければならない。国語科が育む能力はどのようなもので、数学科が育む能力はどういうものか。それぞれの教科が育む力を指導者がしっかりと掴んでいて、各教科の中で子供の力を伸ばしていけば、「教科等横断的な視点」の基本が実現していくと考える。

## (3) 総合的な探究の時間と各教科の連動

こうして育成してきた「教科等横断的な視点」の総仕上げが、総合的な探究（学習）の時間となり得ると考える。今回紹介した実践でも、コア教科として総合的な探究の時間が重要な役割を担っていた。

新しい学習指導要領の土台にあるのが「コンテンツからコンピテンシーへの転換」という思想にあることを踏まえると、総合的な探究（学習）の時間も、従来のコンテンツ型だけでなく、コンピテンシー型を構想していかなければならないはずである。まず「育成したい資質・能力」が最初にある、そこから総合的な探究（学習）の時間のあり方を構想すると、コンピテンシー型になり得る。すると、各教科も「育成したい資質・能力」から構想されているわけなのだから、なにも特別なことをしなくても、自然と総合的な探究の時間と各教科が連動していることになりうるはずである。

## IV 成果と課題

今回の取組については、結果的にいわゆる「コンテンツからコンピテンシーへの転換」という視点での教科等横断的な学習活動が形成されたが、指導に当たった学年団がどの程度それを意識して計画を立案したかについてはいささか疑問が残る。Ⅲに述べたように、各教科の育む力についてしっかりとした理解がなければ、教科等横断的な視点での指導の芯に触れることが難しいはずだからである。ただ、本校が開校以来教育課程の中心的位置づけで進めてきた「キャリア教育（キャリア発達を支援する教育）」の取組が、結果的にコンピテンシー育成の重要な役割を担ってきたと言える。

本校が開校以来実践で大事にしてきた「学習に際して自分の目標を設定すること」、「自分の気持ちや考えを言語化すること」、「仲間と協働して学習すること」、「振り返りを重要視すること」などは、コンピテンシーとしての資質・能力を育成する上で重要な視点であるからである。

こうした開校以来の基盤があった上で、教科等横断的な視点での教育活動を構築していったことが、今回の取組につながったと考える。

今後は、こうした本校の土壌としてあるものを各種計画の中に意図的、計画的に取り入れていくこと、取組の評価及び改善のサイクル確立を進めることが、本校教育課程の更なる改善・充実につながるものとなる。

(2022年6月 公益財団法人小野寺パラスポーツ振興会)

## 【参考・引用文献】

- ・ 文部科学省『特別支援学校学習指導要領（幼稚部・小学部・中学部）』及び『同 解説』、2018
- ・ 同 『高等部学習指導要領』及び『同 解説』、2019
- ・ 澤井陽介編著・横浜国立大学教育学部附属鎌倉小学校著『鎌倉発「深い学び」のカリキュラム・デザイン』東洋館出版社、2018年
- ・ 白井俊 著『OECD Education 2030 プロジェクトが描く教育の未来』ミネルヴァ書房、2020年
- ・ 北海道札幌稲穂高等支援学校 著『研究紀要』（第1号～第8号）2010～2018
- ・ 鶴殿篤著『教科等横断的な視点とは何か』Web 2017